

「1964年の篠田正浩」

映画監督・篠田正浩は2003年に『スパイ・ゾルゲ』（配給 東宝）を発表した後、引退を宣言し映画製作の一線から退きました。それまで30本余の作品を世に送っています。早稲田大学在学中は競走部に所属し箱根駅伝にも2回出場という経歴の持ち主です。早稲田時代の同級生に松竹の創始者系列の大谷・白井一族の白井昌夫がいたことから推薦を受け1953年に松竹大船撮影所の助監督として入社し、原研吉、中村登（『古都』（1963）で第36回アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた経歴あり）、岩間鶴夫らの監督に付き、1960年に監督昇進します。篠田正浩と同期で入社したのが高橋治（その後作家活動に転じ直木賞作家に）、翌1954年に大島渚、山田洋次、1955年には吉田喜重、石堂淑朗、田村孟が松竹大船に入社します。何ともこれだけの逸材がこの短期間で集まったとは信じ難い出来事です。

やがて、大島渚、吉田喜重とともに「松竹ヌーヴェルヴァーグ」としてクローズアップされますが、映画監督としてデビューした1960年といえば日米安保条約改定を巡り大々的な反対運動が起こり、日本は「政治の時代」を迎えます。その影響は映画界特に松竹のヌーヴェルヴァーグ派にも及び、学生運動を題材に大島渚は『日本の夜と霧』篠田正浩は『乾いた湖』を発表します。この二人は同じ題材を扱いつつも、その対照的とも言える作風と主張を織り込む訳ですが、それは一つの日本人論と言えるのかもしれませんが。この対比は実に興味深いものです。

さて、1964年に篠田正浩は2本の作品『乾いた花』（3月）と『暗殺』（7月）を発表します。いずれも篠田の感性と美学が十二分に発揮された問題作と言えるでしょう。まず、『乾いた花』について。この作品は会社側から松竹大船調の作品とは異質であるとされ、公開が8ヶ月伸びてしまったという経緯のある作品です。一言で言えば、これはヤクザ映画です。正真正銘のヤクザ映画であり、何らイデオロギー的要素のない博打とシマの奪い合いの抗争に明け暮れる極めて生産性の低い街のダニに属する男の物語です。すでに人生を諦観し虚無的で、ある意味救いようのない人物の物語です。後に東映で盛んになるヤクザ映画ですが、東映作品に現れる鶴田浩二は特に原理主義的任侠道の使徒的存在ですがこれとは異質であり、『乾いた花』のヤクザ村木（池部良）は常に眉間に皺を寄せ苦虫を噛み潰したような表情を見せるだけではなく、面白いことがあれば大いに笑うことができる人物として表現されます。ヤクザ映画とまったく無縁だと思われていた池部良がこれほどのハマり役とは驚きます。（当時、池部良は東宝の専属俳優。後年東映で『昭和残侠伝』シリーズで重要なヤクザを演じることになります）とてつもなくよい演技で、全編通して緩むことのない緊張感を維持します。また、相手役として登場する加賀まりこの素晴らしさもあります。この役は松竹の女優さん、いわゆる松竹大船調の女優さんでは出せない雰囲気であり、岩下志麻、炎加世子あたりでは無理でしょう。ほぼ無言の香港からやって来た刺客役の藤木孝それに村木の弟分的なヤクザを演じる杉浦直樹は好演です。小津安二郎の遺作『秋刀魚の味』（1962）でヒロインの岩下志麻の弟役を演じた三上真一郎が、チンピラ役で出演していますが、筆者は三上真一郎はチンピラ、ヤクザの役でこそ生きる俳優であり、『仁義なき戦い』（1973）で舎弟の渡瀬恒彦にいいようにあしらわれる煮えきれないヤクザを演じ頂点を迎えたと思っています。また、ヤクザのボスを演じる宮口精二と東野英治郎のやりとりは後年の『冬の華』（1978年 脚本・倉本聰、監督・降旗康男）を想起させてくれます。ラストシーンの敵役の山茶花究の登場は何より贅沢なキャスティングです。篠田の意欲的な試みとしては、白黒画面のコントラストの強調とパンフォーカスの多用からも窺えます。原作は石原慎太郎、脚本は篠田と馬場当の共作。撮影は小杉正雄、音楽は武満徹と高

橋悠治、美術は戸田重昌、録音は西崎英雄という顔ぶれで、その名を聞いただけでも身震いするほどの陣容です。

ここでちょっと、『乾いた花』の製作を担当した「にんじんくらぶ」という独立系のプロダクションについて触れたいと思います。（配給は松竹です）このプロダクションで製作された作品には、小林正樹監督『人間の条件』（全6部 1959-1961）『怪談』（1965）田中絹代監督『お吟様』（1962）羽仁進監督『充たされた生活』（1962）といった極めて良質な作品があります。設立の中心人物は、岸恵子、久我美子、有馬稲子の三人の女優さんで、「俳優のための映画を企画し、自由に映画を作る」ことを目的としました。1954年のことです。前年に五社協定が結ばれましたが、「専属契約下での他社出演」を実現しようとしたものです。次第に俳優のマネジメントも積極的に取り組みますが、前述の小林正樹監督の『怪談』がカンヌ映画祭審査特別賞、アカデミー賞外国語映画部門にノミネートされたものの興行不振のため多額の負債を抱えてしまい、1965年に事実上の倒産という事態となりました。芸術性と興行性が噛み合わないという状況は多々見られますが、これも映画を取り巻く環境の中の土壌の問題なのか、今でも解決の難しいテーマです。

『暗殺』は司馬遼太郎の原作、脚本は山田信夫。幕末テロルの時代の清河八郎にスポットを当てます。清河は元々尊皇攘夷派を糾合しながらも、幕府のもとで浪士組なる組織を結成し新撰組への流れを作った矛盾に満ちた人物で、1863年に旗本一味らによって殺害された人物です、没年三十二。

『乾いた花』で映像美を追求しかなりの完成度に達することができたことから、さらに発展型を目指したと思われませんが、手持ちカメラでの撮影による効果は出ているにしろ、前作を上回るまでには至っていないような気がします。この頃、松竹京都での時代劇製作の状況がよく判らないのですが、決して娯楽性を重視した大味な剣劇にしなかったところに篠田の矜持を感じるころでもあります。同じ幕末のテロルを豪快に描いた、それなりの面白さを持つ五社英雄の『人斬り』（1969年）とは根本的に異なる作品です。このあたり、篠田の日本人論の展開の場になっているような気がするのです。2012年8月に日本経済新聞からインタビューを受けた篠田は、皇国史観の下で教育を受けたことから、「戦後のアメリカ民主主義を教わったけど、日本人の本質、一番のプロトタイプはいかに死ぬかにあった。死のためのモラル、死への美意識、死によって清算される世俗の醜悪、そんな日本人観が私にとりついた」と語っていることから。（日本経済新聞 2012年8月11日「生き方の主役、個人不在、目をそらす」から）

清河八郎を演じた丹波哲郎は珍しく抑制の効いた演技を見せ好演、岩下志麻は出番が少ないような気がするも、こうした作品では岡田英次、木村功、小沢栄太郎、清水元といった俳優の存在感の重要性を感じざるを得ないところがあります。また、坂本龍馬を演じた佐田啓二は、この作品が松竹での最後の作品になったようです。（1964年8月17日に37歳で死去）

(1.07.2025)